

葉書

2024. 4. 25

転勤をするたびに、お世話になった方々に挨拶状を出している。今の時代はメールもある。大変便利である。だが、挨拶状は、形として残る葉書で出したい。特に、今回は、転勤だけでなく、退職の挨拶もある。

いつも4月の2週目くらいには出すようにしている。目安としては、転勤をして1か月以内に送るものだろう。挨拶状の葉書を投函して数日後だった。数件のラインと電話があった。どうやら同じ日に届いたらしい。

「この度は、ご丁寧にご挨拶のハガキを賜りまして誠にありがとうございました。そしてこれまでの長い教員生活、本当にお疲れさまでした。先生とは高校時代からのお付き合いでしたので、なんだか寂しさも混じりながらとても感慨深くおハガキを拝読させていただきました。もうあれから随分経ち、いつの間にかご退職の年齢になったとはなんだか信じられない思いです。」

中には、このようなラインの文面もある。ありがたい。やはり、退職というのは、特別なものなのだ実感させられた。これは、長い文面の一部である。ラインでも十分に思いは伝わってくる。やはり便利である。ところで、退職の挨拶状が自分のところに届いたとして、果たして、このような返信ができるだろうか。そう考えると、感謝の気持ちが湧いてくる。

今までに10回以上も転勤の挨拶状を出してきた。逆に、これまでにいただいたものもたくさんある。その多くは、未だにとってある。今回、退職の挨拶状をしたためるにあたって、そのすべてを改めて読んでみた。その方のそのときの思いが伝わってくる。

ご退職の方の文面も読んだ。30年以上にもわたって務めてきた教職に対する思い、その職を辞するにあたっての胸中が伝わってきた。それに比べると、私がしたための文面は、退職に関して、あっさりしている感は否めない。それよりも、これからのことに重きを置いた内容になっている。私らしいと言えばそうである。常に、先のことを考えている、前しか見ていない。

自分としては、退職というよりは転勤という感覚なのだが、まわりはそうは見えていないということだろう。私にとっての新しい職場である幼稚園にとっては、退職した人かどうかは重要ではないのではないか。どのような人物かのほうが大切である。

今回、多くの方々に挨拶状を送らせていただいた。これからは、その葉書の文面に恥じない生活を送っていきたい。